

勝海舟、咸臨丸と竹川竹斎

私は若い時から「敗軍の将」勝海舟に大変な興味をいだいていた。創薬研究者としての現役を引退するとき何か創造的なことをしたいと思い明治維新前後の歴史調査を行った。

1995年から2010年の間、勝海舟と咸臨丸周辺の人物調査とともに幕末から維新にかけての歴史的史跡を訪ね、故郷の先達竹川竹斎の存在を知り、二人の関係を調査したので報告します。

1 常識としての勝海舟の生涯と私の認識

勝海舟は1823年（文政6年）に生まれ、1899年（明治32年）まで生存した稀有の幕末、明治期の政治家です。激動の社会情勢の中で世界情勢に詳しく、徳川幕府の終焉を確信しつつも常に日本人を意識していたがあくまで御家人の立場を保ち、徳川封建時代に終止符を打つことに的確なかじ取りを行った。一方、幕府崩壊後徳川慶喜の生きる道案内と和宮の維新時における世話をつつがなく全うしながら明治新政府の良き相談役としても活躍して日本の近代化に貢献した最高の人物です。

人により勝を二股武士としてあるいは個性の強さから毛嫌いする人もいますが、私は時代の動向を正確に把握しながらあくまでも徳川御家人としての立場を貫き通した希に見る人物として尊敬しています。

世の中勝軍の将になることは多少の知識、見識があり、時代の流れに身をまかせればそれほど困難なことではありませんが、敗軍の将になることはよほどの信念と実行力がなければ完遂できるものではないと思います。

幼名を麟太郎といい貧乏な旗本勝左衛門の家に生まれた。父は貧乏ではあったが剣の達人で小吉と愛称され、貧乏な町民の頼りになるハチャメチャな武士であった。小吉は平山平蔵から哲学の素養を受けたが、麟太郎にとっては反面教師であったかもしれない。その一方、麟太郎が野犬に拳丸を噛まれた時に見せた看病の姿から理解できるごとく強い愛情を注いだ。一方で剣客の父は島田虎之助と親交があり、麟太郎はこの剣客から剣、禅、蘭学の手ほどきを受けた。彼は生涯の師として島田虎之助、佐久間象山、横井小楠をあげている。本家の男谷からは当時の社会常識としては不思議ではないが相当な差別扱いも受け、少年心に大変悔しい思いをした。少年時代島田虎之助に剣を、永井青崖に蘭学を教わり、西洋兵学、砲術を苦学の中で学んだ。これらの勉学は母の深い愛情に包まれて励んだ。

当時書籍は高価で貧乏人の手に入るものではなく本屋で立ち読みをしていたところ函館の豪商渋谷利右衛門の目にとまり彼の温情により書籍購入にと200両もの経済的援助を受けた。また、渋谷は伊勢の竹川竹斎、灘の酒造家嘉納治右衛門、銚子の醤油醸造家浜口義兵衛を紹介した。この3人は麟太郎後の海舟の有力なうしろ楯となった。このような背景の中で麟太郎は自分自身の生き方の在り方と強い信念を育むことになった。

1850年には私塾を開き蘭学と兵学を教え、1854年に大久保忠寛の推薦で竹川竹斎著の

海防論をもとにした海防意見書を幕府に提出した。その後、長崎に赴き、多くの新知識を得て、江戸に戻り軍艦操煉所教師頭取を務めた。外国奉行 新見正興らが萬延元年第一遣米使節団として渡米する際、護衛艦咸臨丸艦長としてサンフランシスコに赴いた。このとき海外事情を見聞把握したことがその後の勝の行動の原点を確立することになった。帰国後、講武所砲術師範、軍艦操煉所頭取を経て軍艦奉行並となった。将軍家茂が大坂城に赴くとき艦上で他人を交えることなく神戸海軍操煉所設立の許可を得て、広く人材を集め育成に努めた。しかしその中には幕臣以外の薩摩、長州、土佐藩の若者を交えていたのでその開放的方針が幕府長老の反感を受け 1 年で閉鎖しなければならなかった。この間坂本竜馬はじめ多くの志子達も分け隔てなく育成した。1866年軍艦奉行に復帰し第2次長州征伐において幕府の全権使節として平和的交渉に努力した。

鳥羽・伏見の戦いに敗れた慶喜の命を受け、江戸城の平和的明け渡しの交渉を官軍の参謀西郷隆盛との間で成功した。明治5年には新政府の海軍大輔、参謀兼海軍卿・伯爵、枢密顧問官となった。幕臣ではあったが、新政府においても広い視野をもった政治家として活躍した。岩倉具視ら米欧視察団が外遊中、西郷らの主張する征韓論に国際的感覚をもって反論した。日清戦争にあたってもただ一人反対した。

晩年には「氷川清話」という回顧録を残した。

2 キンデルダイク

日本は江戸時代鎖国政策をとり、出島でオランダからの限られた海外文化吸収のみが可能であった。大きな帆船の造船さえ禁止していたが、1853（嘉永6年）ペリーの来航を通して見た蒸気船の威容に肝を潰し、次いでオランダ国王から贈呈されたた観光丸の威容に開眼された幕府は蒸気船3艘の造船依頼をオランダに行った。咸臨丸はキンデルダイクのスミット造船所で造船された。キンデルダイクがどこにあるのかさえ知らなかった私は何としてもこの造船所を見たいという欲望にかられた。オランダのアムステルダムには学会の友人でサーの称号を持つベン・ジョルジェ博士がいたので早速彼と連絡をとり訪れることにした。

岩倉使節団がオランダを訪問したのは1873年（明治16年）2月24日です。米欧回覧実記では米英仏訪問後であったので近代文明の異常なる進歩にはさほど脅威の説明はなされていませんが、低地で小国でありながら毅然として一国を築き上げている姿を見て日本もこの国を見習うべきであると感動した文章はみられる。「家を建て、船を造るにしてもその材料はすべて他国から仰がなければならない。しかし国民の勤勉により海辺には大堤を築き、陸には家屋、海には船がひしめいている」と記述している。

ハーグへ向かう途中「河幅千二百メートル」満々として「海のごとし」というマース河に架かる橋に一行はおどろいている。26日ロッテルダムに足をのぼしているが「途上みな塗泥の田地にて、溝渠（運河）縦横なり、村落処々にあり、風車閃々として、林の上に抽んで、水道は堤上を流れ去る」と表現している。使節団は10日間に亘ってロッテル

ダムの造船所をはじめ、隈なくオランダを見学した。

私はベンの運転でアムステルダムからロッテルダムに向かった。都会を後にして郊外の田舎町をかなり走行し簡素な美しい住宅街ロッテルダム南東のキンデルダイクに入った。車中から道路左手に巨大なスミス造船所をマース川に見ることができ感激した。しばし感激の気持ちを持って造船所の外観を眺めながら休息した。記念にマース川のスケッチを短時間で行った。このときキンデルダイクは有名なオランダ風車保存地区で大変な観光地であることをした。スケッチした土手の左手が巨大なスミス造船所であり右手が風車保存地区であった。



マース河スミス造船所で咸臨丸は造船され、その近くに風車保存地区がある。

日本人の旅行客団体が大勢風車保存地区へ向かって歩いていたので私も観光したが雨模様になり慌てて引き返すことにした。帰路保存地区が美しく遠望できるカフェに入り、窓越しに林立する風車地区のスケッチをした。このときの経験でますますオランダに惹きつけられた。ライデンに戻ってきてベンの友人が経営する店で夕食をした。ライデンは以前から興味を持っていた都市である。

その後、2003年7月イタリアのスケッチ旅行に参加したとき個人行動を取り生物学者でシーボルト研究家のライデン大学 J. H. van ディーレンドンク教授の家に1日のホームシテイを行った。ライデン大学付属植物園のシーボルトの日本庭園をめぐる藤、アケビ、カエデなどと“お滝さん”の墓碑を見せて頂いた。そこにはシーボルトの胸像があった。天井から3面の壁にまで著名人が書いた落書教室がある。高層ビル一面に日本語で書かれている芭蕉の俳句「荒海や佐渡に横たふ天の川」を見て驚いた。日本庭園でスケッチをしたのち、ライデンの街を隈なく案内してもらった。医学美術館で解剖の見学教室を見た時には異様な気持ちになり驚いた。国立民族博物館ではシーボルトの日本コレクションの質、量の多さと素晴らしさに驚嘆した。日本の古書を扱っている専門の書店は興味深く数冊購入して日本に送付してもらった。出島通りと命名されている道の中ほどに薄暗

いバーがありそこには日本人最員の客ばかりが屯して楽しい一時をすごした。

1854年（嘉永7）にスンピン号（観光丸）は長崎に寄港し、ファビウス中佐が日本の海軍伝習に力を注いだ。幕府は嘉永7年1月に年号を安政と改元し、1855年、安政2年7月29日長崎に海軍伝習所を開設した。そのとき勝海舟は第一期伝習生として軍艦の操作法をファビウス、ライケンに学び、第2期伝習生のときはカッテンディーケから軍艦操作法を学んだ。

1877年にはスクナー型コルベット艦咸臨丸がロッテルダムで竣工され、カッテンディーケ指揮のもと安政4年長崎に着港した。咸は和氣、臨は望むという意味で易経から出た文字である。伝習を終えた勝はそこへ咸臨丸の総督に就任した。

3 竹川竹斎（射和村）

勝海舟が海防意見書を幕府に提出して小栗上野ノ助忠順と議論を彷彿させたことは衆知の事件であるが、このとき勝は竹川竹斎が記述した「護国論」を幕府に提出している。調べてみると竹斎が伊勢射和村出身であることを知り、私の出身地宇治山田に近いことを知った。私は何としても竹川竹斎の経歴、実績を調査したくなり、伝手をたより旧竹斎邸をおとずれることにした。

2002年1月5日宇治山田駅前から友人の車で伊勢道を走り松阪に向かった。豊原町標識を左折し、国道42号を南下して櫛田川に至る。友人が竹斎邸に着いたという。橋のたもとに射和村、中万町の案内標識板がありタイムスリップしたような豪華な屋敷が道筋に並んでいる。

右手に総合商社国分家の屋敷がありその前が竹斎邸であった。さらに進むと長谷川家などの豪華な旧邸がある。5分ほど歩くと中万地区であり、ここから富山家、竹口家が出ている。のちに友人が姻戚関係にあるという竹口家を訪れ歓待を受けたが現代では信じられないほどの豪華な和風屋敷が残っている。

中万地区出身の竹口喜左衛門信義は江戸に「伊勢家」を構え竹斎と協力して勝海舟の経済的支援をした。海舟がサンフランシスコに向かうとき二人は大刀と脇差を送っているが、勝は両刀をさした写真をサンフランシスコから礼状をつけて竹斎に送っている。この写真は多くの成書で紹介されている馴染み深いものです。信義はヘボン始め外国人に知人が多くパークスを竹斎に紹介している。

信義による「横浜の記」という資料が横浜開港記念館に保管されている。松阪、射和地方から伊勢商人と呼ばれる豪商が数多く出現し三井も松阪地方出身で江戸に出店を持ち本店は地元においた。

竹斎邸で案内を乞うと大変上品な老婦人が出てきた。奥さんの隆子婦人である。古風な門をくぐると狭い小砂利を敷き詰めた小道の左手が黒塀、右側に見慣れぬ青々とした竹の葉が一際目を引いた。玄関には老仙人二人を描いた水墨画の立て屏風があり、欄間に射和文庫と書かれた魅力的で訪問客を惹きつける立派な横長の額が掛けられていて印象的であ

った。

書齋風の客室に通されたがまことに風情のある部屋で、床の間の違い棚、「射謝文庫（左大臣 一条忠香書）」と書かれた扁額、勝海舟の書になる「射和書院」という扁額も保存されていた。そのほか貴重な江戸期の資料が多数張られている屏風が目に入り別世界に招かれた思いがした。

机の上にはすでに古い和綴の資料が積み重ねられていた。竹川家 12 代当主欣也さんが体調不良の中挨拶にこられ少し話を伺った後は隆子夫人といろいろな話をした。「私は医療関係の仕事に従事しているので、医師でありながら護国論を執筆した竹川竹齋に興味があつてお尋ねしました」というと隆子婦人が「医師ではありません両替商を営む学者です」と返事が返ってきた。勝海舟全書ほかの著書では医師と紹介されていたので驚きました。

やはり歴史は自分の足で訪ねるべきことを再び学びました。

竹齋は文化 6 年（1809）5 月 25 日に射和村に竹川政信の長男として生まれ東竹川家を継いだ。弟は竹口家に養子に入った。

話が一段落したとき資料を手にした。いずれも魅力的なものばかりである。中でも護国論上下 2 巻はもちろんのこと「勝麟太郎物部義邦君 航海日誌」には特別の興味をもった。弥生日記には処々に動植物のスケッチが描かれ見事なものであった。また、松阪大学上野利三教授と学生がまとめた「射和文庫蔵書目録」は貴重な資料であった。目録の中に医学書 16 点、薬学・本草学書 5 点があり興味をそそられたが、原本を読む余裕はなかった。

私はその翌年、再度竹齋邸を訪ね「護国論」と「航海日記」を借り受け榎田川を挟み反対側の川辺りにある江戸時代からの割烹鹿水亭に 4 泊 5 日宿泊して読むとともに近辺の調査を実施した。

護国論を読んだがよくもこの時代これだけの西洋事情を入手、把握したものと感銘しました。また、国防に関しては短期的計画から長期的展望にたつて具体的に防備の在り方を執筆しており驚嘆した。江戸湾、箱館、大阪、能登、下関、長崎などに艦隊を配備し、各艦隊に 2000 トン級の軍艦 12 隻、1000 トン級軍艦 30 隻、運搬艦 10 隻、江戸と大坂には別途配備することを主張。初年度軍艦 30 隻、大砲 600 門、中砲 300 門、そのほかの項目が明記され、年々予備を追加し、10 年後は軍艦 45 隻、大蒸気船 2 隻にするなど具体的数字と予想金額を明記している。それは両替商なだけに経済的に信じられるべき主張であった。この根底があつたからこそ勝は小栗忠順との論戦で勝ちを修めたと判断される。ちなみに小栗も竹齋とは面談していて海防、外交策などについて教えを請うている。

竹齋は池普請日記というのを残しています。この時代射和の田地は灌漑施設が悪く水不足勝ちの上に畑地が多く村民は苦しい生活をしていました。天保 7 年 28 歳の竹齋が企画して築きあげた池は上の池と呼ばれていて天保の水飢饉のとき村民の窮乏を救うことになった。池の構築に 5 千両を要したと言われ、竹川家 3 軒、国分家、山本家がほとんどの資金をつ

ぎ込んだ。500 日の日数と 8 万 5 千人ほどの動員がなされた。



私はこの調査中に竹川家正面玄関と屋敷の外観、廣休が輸入し育てた「ふうの木」、射和村と相可村の農村風景などをスケッチした。ため池は景色もさることながら謂われにも興味があったので後に改めてスケッチに訪れた。

茶、桑の栽培法、蚕の育て方を記した記録とか万古焼窯を開き焼き物産業を起こしたことなど幅広い知識と行動を実践した。孝子夫人からは「射とおしろい」の実物を見せていただいた。大変延びのよい優れたおしろいであるが水銀を含むので今では使用禁止です。射とおしろいと梅毒については拙著「伊勢の偉人たちと歴史散歩」に詳しく記述した。

竹斎邸と櫛田川を挟んだ反対側は相可村で熊野街道と伊勢街道の分岐点にあたる。そこに竹斎と同時期に西村廣休という優れた本草学者が出ていることを知り調査した。自邸内、現在の農協相可支店とその東に廣休は薬草園を持った。栽培した植物は 2000 種に及びタラヨウ、フウノ木、キンポウランなどが残っており、熱帯植物、寒地高山植物など当時では手に入らない多くの草木を育てたりした。

竹斎と廣休は姻戚関係にあり廣休は相可村の豪商大和家の出である。竹斎の妻都賀は西村の分家喜左衛門広美の姉であり、竹斎の実妹邑は広美に嫁いでいる。二人は若年のころ伯父荒木田久守の誘いを受けて風光明媚な二見が浦に旅をしている。二見が浦は万葉集巻 3 でも「伊勢の海の 沖つ白浪花にもが 包みて妹が家づとにせむ」と詠まれている。二人は幸いにも二見が浦で朝日が昇る好天に恵まれ竹斎は

二見のやふしよりつつく白浪の立まくをしき浦の曙
と詠み、廣休は

あはらぎの千尋の浜に立浪の風に乱て飛ぶ鳴かも
と詠んでいる。

竹斎の辞世は

世の中に 我なすわさや 残りけむ こえかねてけり 黄泉ひら坂
この世でもっとやり遂げたい仕事が沢山あることの悔しさが強く滲み出ている辞世です。
これに対し津の豪商川喜田家に嫁いでいた妹琴（ゆか）さんが詠んだ悼みの句は
かぎりありてからは朽ちにし後もなを 名は限りなく世々にのこらん

という詩でした。

4 咸臨丸サンフランシスコへ

ペリーが黒船を率いて浦賀沖にあらわれたのは嘉永6年6月3日、西暦1853年7月8日、日本とアメリカの国交はこの時に始まった。安政5年6月19日、西暦1858年7月29日横浜沖に停泊しているポーハタン号上において日米修好通商条約が締結、調印された。これで日本は鎖国から開国に完全な方向転換がなされた。横浜港には現在横浜開港資料館が設置されていて当時の貴重な資料が展示されている。ここにはすでに紹介した竹口信義著の「横浜の記」が保管されている。資料館の前の庭には大きな楠が植えられているが、これは当時のままである。

万延元年（1860）幕府は日米修好条約批准書交換のため外国奉行新見豊前守ら80余名の使節をアメリカに派遣した。正月23日アメリカ軍艦ポーハタン号に乗船して横浜を出港した。護衛艦として咸臨丸が選ばれ司令官に軍艦奉行木村摂津守、指揮官（艦長）に勝海舟が乗船することが決定された。艦医には洪庵の弟子牧山熹朔（修蔵）が就任した。アメリカ海軍大尉ジョン・マーサー・ブルックが付き添った。

よく「勝が沈めば、小栗が浮上し、小栗が沈めば勝が浮上する」と言われるが、このとき副使節として小栗はポーハタン号に、勝は咸臨丸に乗船して出航した。勝はまだ、それほど高官ではなく中途半端な立場であったが一応艦長としての役割を担っていた。同乗者には司令官木村摂津守、軍艦操練所教授方手伝の赤松大三郎、航海長小野友五郎、蒸気方としての小杉雅乃進、医師の牧山修蔵、木村宋俊、通訳としてジョン万次郎に福沢諭吉ら総勢96名が乗船していた。

品川を正月13日、太陽暦2月4日に出帆、羽田沖を通過して6時過ぎに横浜港に着いた。横浜でブルック大尉一行10名が乗艦した。17日の朝碇をあげ、観音崎の突端を回って浦賀に入った。ここで、薪、水、野菜を積み込んで正月19日に出帆し、日本を離れることになった。

勝の航海日記に13日品川を出帆し神奈川に至り、16日浦賀で水など調達し、19日浦賀を出航して安房海を回り進路変更したとき西風が強く甲板に浪が襲い、夜中に入ると風はますます強くなったと記述している。20日の午前3時ころ大風雨が押し寄せた。艦は縦揺れ、横揺れすさまじく翻弄されることになった。このとき日本人の乗組員で船酔いをしなかったのはジョン万次郎、小野友五郎、肥田浜五郎、浜口與右衛門と福沢諭吉のみであったという。

諭吉は木村の単なる付き人で責任もなくあの時化の中でも酒びたりになっていたとのことである。勝は完全にダウンして部屋に引きこもったままであった。こんな状況であったからその後の航海はブルック大尉一行に任せざるを得なくなった。21日暴風雨はやや収まったがまだ乗組員の船酔いは続いた。

日米協会が纏めた万延元年 第一遣米使節日記村垣淡路守範正記述には次のような文章

が残こされている。「竹芝の浦波遠くこぎいでて世に珍しき船出なりけり」と詠い、18日に品川沖の軍艦ポーハタン号に乗り込み、風強く、雪なども降り天候思わしくなく準備などに日を費やし、21日に出航した。「真帆あげてしなどの風にとくはせよ神の御国の船出なりせば」また「夏しま猿島観音寺のあたりは山のはしるかとおもうばかりいとはやく浦賀港などはるかあなたに見て、安房の淵の崎岬をでれば」これより日毎に同じ大嶋を右に見て帆けるが、西風はげしく、波荒ければさすがの大船も、動揺すれば本人、船員達がひどい船酔いしたことを記載している。23日も同様の状態が続き、24日は忠順上の段の部屋なれば、洲の崎岬を出しころ、部屋に入りしまま、音信もなくと記述し25日には「安房の海をでてより舟うごくことますます甚だしく、風高浪なれば少しもしづまることもなく、ゆられゆられつかれければ、いつしかねむりにつけり」と記述している。強風は28日まで続き「けふも風つよけれど、雨止て少しは静かなり」風、波がやや収まり始めたことを報じている。

同じような状況は咸臨丸にも起こり、勝は指揮官としての役割を全う出来なかった。艦長として正式な下命をうけてはいなかった勝はその後も往路の間中つむじをまげたままサンフランシスコまでできてしまった。勝と福沢はもともと生理的に相性悪く、この騒動以来福沢は勝を全く受け入れなくなった。このような強風と波の異常さは国内を航海していた勝ほか乗組員には想像もつかなかったであろう。厳しい冬の太平洋外洋に踏み入れた途端に遭遇した時化であった。時化と言っても季節的に考えて台風ではなく、房総沖は冬季には常に強風が吹き荒れ、暖流が流れ、高い浪頭がたつところだ。

私も若いころ暖流の早い流れの手前で良く舟釣りを楽しんでいたので時化の光景が目には浮かぶようです。そこで咸臨丸、ポーハタン号の遭遇した状況を思い浮かべて洲の崎、野島岬遠景のスケッチをした。当時キング岬と呼ばれていた野島岬の灯台は太平洋航路の航海測量基点とされていました。筆ペンを用い短時間でスケッチしましたが私なりに気に入った作品が出来上りました。

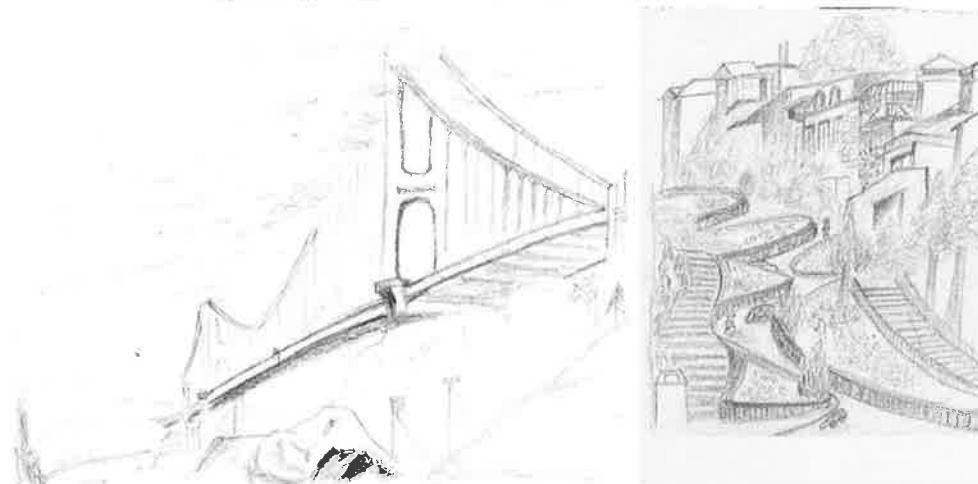


村垣航海日誌によるとポーハタン号はサンフランシスコに向かう途中2月14日ハワイホノルルで給油、物資の調達を行い、ハメハメハ大王などから歓待を受け、3月3日ホノルルを出航している。3月9日サンフランシスコ港に到着した。

咸臨丸はハワイに立ち寄るコースではなく大圏航路と呼ばれるコースをとったということで両艦がサンフランシスコまで異なった航路を取り途中で出会うことは不可能であった。これでは咸臨丸がなぜ護衛艦として派遣されたかが理解できない。ポーハタン号に乗り込んだ使節団はサンフランシスコからニューヨーク、ワシントンまで出向いているが、咸臨丸はサンフランシスコから日本に帰国している。その帰路はハワイ経由を辿っている。咸臨丸は日本人の手で日本とサンフランシスコを往復した最初の軍艦であるとの評価だけは受けている。しかし往路は実際にはブルック大尉らによってなされたもので、勝が指揮官としての役割は果たしていない。

咸臨丸乗組員には2月26日サンフランシスコの山々が見えてきた。一説では3月17日(2月25日)サンフランシスコに到着したともいわれている。山にそって備え付けられたホートポイントの砲台があり、しばらく行くと、港の真ん中にアルカトラツ島の砲台がある。ここには250門の大砲が置かれていた。ゴールデンゲートに入港したとき砲台から21発の祝砲が轟いた。2月27日に入港している。

勝はサンフランシスコ湾の防備状況を見て、攘夷論など暴論であると確信した。私は1992年5月4日、1937年に建てられたゴールデンブリッジのスケッチに出かけた。サンフランシスコの有名な霧が橋にかかり誠に美しい景色であった。



ゴールデンゲートブリッジと高級住宅街

咸臨丸乗組員一行と木村摂津守は上陸して五階建ての高層建築インターナショナルホテルに案内された。途中馬車の車窓からみる街は日本では信じられない立派な商店、建物が並びただだ目を見張るのみであった。ホテルは赤レンガ造りの御殿のようなものである。その豪華な、ロビー、部屋、調度品、設備に乗組員一同感嘆した。始めて乗るエレベーターには皆驚愕した。このホテルには136の部屋があり、すべてが個室であった。江戸の状

況とはあまりにも差がありすぎる現実に驚ろかされた。

この航海で咸臨丸の損傷はひどくブルック大尉の仲立ちでメーアアイランド海軍工庁で修復にあたった。修復に要した日数は50日以上にわたり、宿舎はメーアアイランド海軍造船所近くに確保された。この間に勝以下乗組員たちはそれぞれサンフランシスコの街を見学して回った。

勝も福沢も街のショウという写真館で写真をとっている。このときに写した大小二刀を手挟んでいる写真を勝は竹川竹斎に送っている。発展化の諭吉は写真館の娘とねんごろになり二人並んで写真を撮ったという写真が残っている。

サンフランシスコの州知事はドーネー、市長はチッシュメーカーで多くの高官宅に招かれしばしば歓待をうけた。村垣日記によるとコモドルタッテナルの邸宅にまねかれて5階建てのレンガ造りの家に驚いている。この邸宅には勝も招かれている。私もサンフランシスコを訪れたとき坂に林立する豪華な高級住宅街に目を見張りスケッチした。かくして勝はサンフランシスコの近代文明がいかに進歩したものであるかを目の前にして日本のあるべき将来の道、姿を確信するにいたった。

3月10日宿舎を引き揚げ修復を終えた咸臨丸はサンフランシスコに寄港した。3月19日、太陽暦5月8日サンフランシスコを出航して、途中ハワイに立ち寄りダイヤモンドヘッドの景観を満喫したのであろう。

北東貿易風を上手く捉えて航行し、5月5日洲の崎灯台が見えた時乗組員一同喚喜した。浦賀から、横浜、品川に帰還した。途中とくに何事もなかったが、この航海中に3人の死者をだした。帰国後、渡米中の3月3日に桜田門の変で井伊直弼が暗殺され年号が安政から萬延に変わっていた。ペリー来航7年後に過ぎない。ペリーはすでに他界していたが使節団はニューヨークを訪ねたときペリーの奥さんから自宅へ招待を受け感激したことが1860年6月27日のニューヨークタイムスに報じられている。

5 榎本武揚の夢と箱館戦争、サラキ岬

幕府がオランダに造船依頼をした3隻のうち開陽丸と名付けられた軍艦はヒップス造船所で製造された。進水式は1865年（慶応元年）11月におこなわれ、オランダ留学中の榎本釜次郎（武揚）は開陽丸で帰国し、慶応3年横浜に着船した。5月開陽丸が日本に引き渡されたとき榎本は軍艦役に抜擢された。この時以来榎本はまさに開陽丸とともに波乱の人生を歩んだ。

江戸城無血開城は国際的に評価される革命であった。その後不満分子による彰義隊の結成並びに壊滅後、榎本は上司勝に袂を分かつと書簡を送り、函館に独立国を設立する夢をいだいた。

品川沖に碇泊していた開陽丸、咸臨丸、回天、神速、長鯨、播磨、千代田形、美嘉保の八艦を率いて8月19日出航した。

勝は幕府軍艦全てを官軍に委譲する約束をしていたので、大変苦しい立場におかれた。

榎本艦隊は館山、千倉、鴨川、勝浦を過ぎ銚子にいたったとき8月22日台風に遭遇した。帆船の美嘉保は座礁して沈没して咸臨丸は清水港まで漂流した。

このとき新政府軍艦富士山、飛龍、武蔵3艦の砲撃を受け捕獲され乗組員の大半が殺戮された。戦死者を出した咸臨丸が清水港に漂着したとき村人たちは賊軍を助けたという罪を恐れて、手出しをしなかったが、清水次郎長が「死人に官軍も賊軍もあるか」と言いこれらを丁重に葬った。これには山岡鉄舟の指導があったという。清水には壮士墓がある。咸臨丸殉死者記念碑が建てられ榎本による碑名が刻まれている。咸臨丸は清水で修復され、榎本艦隊に遅れて函館に向かった。

榎本艦隊は北海道内の浦湾の鷺の木に10月20日着船、上陸した。私は札幌、函館は少なくとも4回は歴史調査に出かけた。2001年3月30日道庁で維新関連の様々の遺品、パネルを見たのち、スーパー北斗10号に乗り、札幌から函館に向かった。車中左手内浦湾鷺の木海岸に建つ一つの標識が目に入った。回天19日に到着、開陽、鳳凰20日に到着と記述されていたので、車窓を通して急いでスケッチをした。

明治元年10月20日は洋暦では12月3日である。大鳥圭介は銀界の景なりと表現していることから雪景色のなか上陸したと判断される。ほかにも車中から見える駒が岳はじめ山々をスケッチした。

開陽丸が函館港に入港したのは11月1日とされている。函館占拠、土方歳三を隊長として松前城を攻め、勝利するとともに松前藩士が逃げ去った江差にまで攻め入り完全に蝦夷地を掌握した。箱館を占拠した旧幕軍は諸外国との折衝を行い、ロシア、アメリカ、プロシア、イギリス、フランスの各国より局外中立国として認めさせることに成功したが、榎本武揚は蝦夷地開拓の許可を求める嘆願書を新政府に提出したところ岩倉具視はイギリス、フランスの公使に「承知いたしがたき筋」との書面をおくっている。そのご新政府軍は箱館の総攻撃を行い壊滅させた。榎本の夢はこれで消え去った。

高田屋嘉兵衛の7代目で北方歴史資料館館長を務めている高田嘉七さんの運転で函館市内を見学し、翌日江差を経て松前から木古内を通り夕刻函館に戻ってきた。湯の川の畔にホテルを取り4月1日は五稜郭を見て帰京した。この時松前城は休観日で入館できなかった。

2004年5月7日米欧回覧実記の会で23代松前孝廣藩主の案内で松前を訪ねた。一般には公開されていない屋敷内で1860年代の復元された姫御膳を戴き感激した。松前城には250種、一万本の桜の木が集められており、桜見木園として保存管理されている。善光寺に血脈の木と呼ばれる桜の木があり、丁度このときは満開で見事なものであった。自からピンク、赤と変化していくことから血脈とよばれている。

桜が咲き誇っている松前城と庭園をスケッチした。城前に有名な松前漬け本店があり、ここで店主自慢の松前アイスクリームを戴いた。

高田さんとドライブして松前に赴いた時、松前から函館まで93kmもあるという。山側に白神岳を見て、横綱の町から豊浜に至り、北島三郎の実家を過ぎて木古内地区に着い

た。ここで車を降りて浜辺に立つと目の前に見えるサラキ岬沖に咸臨丸が沈没しているという標識がみえる。いまだ引き揚げられておらず異説もあるそうです。その景色を眺めながら数分スケッチしてみた。トラピスト修道院を見て函館に戻ってきた。

湯の川プリンスホテルに到着チェックインして部屋に入るとすぐにベランダに出て、函館山（臥牛山）越し遠方に見えるサラキ岬をスケッチした（前出）。山川港の色彩と同じような感触のスケッチにしてみたが、自分なりに満足できる作品が出来上がった。

翌日五稜郭を訪ねた。一の橋を渡り展望台に至る。入口に武田斐三郎の彫像があり、一階が歴史展示場になっていた。この当時武田斐三郎の名前すら知らなかったが、家内に歴史の勉強をしているのにこの人の名前も知らないのと笑われた。五稜郭は斐三郎による設計で特殊な構造をした平城である。城の廣大な庭園を散歩した。藤棚があり通り抜けたところに高松陵雲の生涯を展示してある記念館があった。興味深く見学して歩いた。2001年6月陵雲が明治時代に留学していたという五層石造りの広大なオテルデュウを探してパリの街を歩いたことを思い出した。数回訪ねたことのある有名なノートルダム寺院の左手の一面にオテルデュウはある。観光客はまずここを訪れることはない。私は恐る恐る中に入り廊下から医学校の教室やらX線撮影室を覗いてみた。白衣を纏った医師らしき何人かの人とすれ違った。疲れてきたので、中庭の椅子に腰かけてここで陵雲は最先端の近代医学を教わったのかと思いながらスケッチした。

陵雲記念館前にはイギリス製ブラッケーリ砲とドイツ製クルック砲が対比されて置かれていた。前者は1865年に製造されたものであり、築地台場に設置されていたもので1000mの飛距離を持ち、後者は1860年に製造された朝陽丸の艦載砲で3000mの飛距離を持つと案内板に説明があった。大変興味深いので、記念館をスケッチした。



武田斐三郎も高松陵雲も緒方洪庵の弟子である。陵雲はオテルデュウで学んだ石炭酸水を消毒薬として使用し、函館戦争で敵軍味方を差別すること無く傷病兵を平等に治療し、西洋の赤十字思想を現場で実践しました。新政府軍が優勢になってから捕縛、幽閉され治療にたずさわれなかったが、パール号付軍医デ・メリック医師によって同様の治療がなされた。明治12年に同愛社を設立した。同じく適塾の弟子で、パリで学んだ佐野常民は博

愛社を設立した。1887（明治19年）日本赤十字社と改称された。

五稜郭前のさかえ寿司屋で昼食を取り函館空港から帰京した。

11 最後に

私は薬学、医学研究者として45年近く学んで現役を引退することになったときは本当に専門馬鹿で世情のことには無知でありました。第2の人生を過ごすのに何か別の領域で生きようと考え、60代になって絵の手ほどきを受けていましたが60歳後半から歴史の調査に専念するとともにスケッチの旅を楽しむことにしました。

史実を熟知した上でゆかりの地域を訪問するのと単に名所旧跡を訪ねるのは感激の仕方、感銘度が全く異なります。この10年間大変価値深い経験をしたと思います。私の駄文が歴史好きの年若い皆さまの参考になればこれほど幸せなことはありません。

参考文献

現代日本医療史 河上武 頸草書房

日本医学先人史 橘輝政 医事薬業新聞社

勝海舟全集 江藤淳、勝部真長 頸草書房

海舟覚え書 勝部真長 エルム

勝海舟 村上元三 学研

勝海舟 子母沢寛 講談社

人間勝海舟 和歌森太郎 集英社

咸臨丸還る 橋本進 中央公論社

萬延元年「咸臨」航米 星亨一 教育書籍

竹川竹斎 竹川竹斎刊行委員会編 竹川竹斎翁百年祭実行委員会

竹川竹斎 松阪市立歴史民俗資料館編 竹川竹斎生誕二百年事業実行委員会

伊勢商人、竹口家の研究 上野利三、高倉一紀編 泉書院

伊勢の偉人たちと歴史漫歩 西井易穂 風詠社

緒方洪庵伝 緒方富雄 岩波雄二郎

緒方洪庵と適塾 梅溪昇 大阪大学出版会

福翁自伝 福沢諭吉 慶応義塾創立百年記念

福沢諭吉 大下英治 経済界

福沢諭吉と写真屋の娘 中崎昌雄 大阪大学出版会

シーボルト 板沢武雄 吉川弘文館

坂本竜馬と明治維新 マリアス・ジャンセン、平尾道雄・浜田亀吉訳 時事通信社

航 網淵謙錠 新潮社

箱館戦争写真集 菊地明、横田淳 新人物往来社

聖書と日本の近現代史 河上民雄 日本基督教団銀座教界

堂々たる日本人 泉三郎 祥伝社

日蘭交流の歴史を歩く KLMオランダ航空ウインドミル編集部 NTT出帆